

伊勢崎郷土読本

(第1集～3集 3冊合本)

復刊版



群馬地域文化振興会

渡辺 敦監修 橋田友治著

伊勢崎郷土讀本



伊勢崎郷土史研究會編

序

六三制の新教育出發を機會に、社會科が設けられて、兒童も生徒も盛に質問したり調査をするにこそがしくなつた。私は前半生を兒童の教育にさゝげて來たのでこの新しい學び方の盛になる程、若い者を賢くし、しんけんに分かち進んで物を知る方法をさとつて、一生がいをゆたかな文化遺産の利用者になつて過すばかりでなく、之を子孫後世までも残して、傳統の古い日本文化にみがきをかけた上に、どしどし／＼高上させたり深みを加え得るものだといふことを考へて、よろこびに堪えない。實は毎日の質問せめにあつてすいぶん困らせられもするけれど、貧しい暮らしをする中で、多勢の子供を育てる苦勞のようで、つらい中にも、末々の成長をそうぞうしては、内々うれしさに心をおどらせて居る。

この度、橋田君が思い立つて此の本を書くといふので、大へん有益なことだから、一二助言してあげたが、出版を急がされたのと、紙數にせいげんがあつて、思うぞんぶん書けなかつたのを残念がり、引きつゞき第二輯以下をつゞつて、わが伊勢崎市民の先祖たちがどんな風に生活をして來たのかを明かにし、少年少女たちのきたいにそいたといつていた。私もこの善いくわだてになる本が次々と皆さんを満足させて愛讀されることをのぞむ。

昭和二十二年十二月

渡邊 敦

渡邊敦監修・橋田友治著

伊勢崎郷土讀本 第一集

伊勢崎郷土史研究会編

内 容

- 一、伊勢崎市と私達の環境
- 二、考古學と私達の郷土
- 三、奈良朝平安朝頃の伊勢崎
- 四、鎌倉期の伊勢崎と赤石の地名
- 五、戰國時代の私達の郷土
- 六、赤石城の攻防と上杉謙信
- 七、伊勢神宮と伊勢嶺の地名
- 八、私達の手近な研究資料

序 渡邊 敦
表紙(地輪) 渡邊 亨 講

伊勢崎市と私達の還境

私達のふるさと、伊勢崎市は、昭和十五年の九月十三日に、それまでの佐波郡伊勢崎町と、殖蓮村、茂呂村の三つの町村が合併になつて伊勢崎市と呼ばれる事になつたのです。

この伊勢崎市の北の方には、赤城山が雄大な裾野を、なだらかにひいて、青空の下に、くつきりとそびえて居ます。

西には、淺間山が噴煙をたなびかせて、遠く見えますし、その右隣りには、榛名富士が美しい姿を見せて居り、更に、三國峠と呼ばれる、上州（群馬縣）越後（新潟縣）信州（長野縣）の國ぞかいの山脈や、更に又遠く西南の方には、甲武信が巖や、秩父の連山も見えます。

北東の方には、日光の男體山や、太田の金山なども、指さすことが出来ず、東と南は、はる／＼と開けて、こゝから關東平野とよばれる、大きな平野が始まります。

市街の東の方には、赤城山の小沼を水源地にする、粕川が流れ、西の方には、昔の利根川の河床だつた、廣瀬川がゆたかな、水量と、美しいせゝらぎに、四季とりんぐに、月をうつし、雲に映え、花をうかべて、私達の心にうるおいを與え、眼をたのませてくれます。

この伊勢崎市の風物を私達は、何の氣もなく、毎日ながめています。道ばたの石くれや、一本の木、一本の草にも、夫々に、ゆかしい物語りや、なつかしい歴史の跡があるのです。

ところが、私達は、伊勢崎市に住んでいるのに、伊勢崎の事をあまり知りません。

ある日、私は、郷土史の研究家である、伊勢崎圖書館の渡邊敦先生の處へ、この伊勢崎のことを、まゝに行きました。

「先生。今日は伊勢崎の古い事を、お話していただきたいと考えて、來たのです。」

私は、あいさつをすませると、早速、先生に質問を始めました。

續日本紀
原史時代

文字や書物に残されて居ない時代のこと

「伊勢崎の古いこと、と、言つたところで、古い事は、いろ／＼あるから、どういふ事だか、もつとくわしく言つてくれなくては、話しようがないよ。」

先生は、にこ／＼しながら、何か書物をして居られたのを、やめて、眼鏡をはずして、私の顔を見ながら、こう仰言います。

「そうですね。たとえば、伊勢崎の名前の起りなぞを話して下さい。」
「伊勢崎と云う地名は、かなり近代のものなのだよ。」

と前置をされて、先生は一寸考えるような腫をしていましたが、やがて、ぼつり／＼と話しだされました。

考古學と私達の郷土

「伊勢崎の古い事を調べようとしても、文書に出てくるのは、續日本紀の奈良朝から平安朝より後の事で、それより前の原史時代とよばれる頃の事は、今では、書物では全然調べる事が出来ないのだよ。」

考古學

「では、その奈良朝より前の事は何も解らないのですか。」

「いや、原史時代の事は、古墳や、そのほか、開墾などの時に出て来るはにわや、石器や土器のような、出土品によつて、いろいろと研究したり、想像したりするのだよ。こうゆう方法を考古學と云うのだ。伊勢崎附近では、先住民族だつたと云はれるアイヌ族の遺品だと云う縄文土器や、原史時代の彌生土器などが、たくさん出ている。この机の上にあるつぼも、彌生式土器の一つだよ。」

先生の指さされたのは、雑草を二三本入れた、土の花瓶のようなつぼです。上で焼いた、よごれた、しかし、おもしろい形の壺つぼです。

「このつぼは、今の壽町の中島の伊勢崎工場がたつ時に、あの大きな煙突を立てる爲に穴あなを掘つた時に、出て來たものだ。このつぼのつくり方から考古學的に考えて見ると、今から千五百年か、それよりも前に、あの附近に、もう、かなり人が住んで居た事がわかるし、このつぼと一緒に諸に出た、いろいろの土器の、かけらなどを見ると、祭具まつぐに使われたも

文化遺跡

文化遺物

文化遺産

のが多いので、その頃の人達が神様でもおまつりしたものと考えられるのだ、このようにして研究して行くと、私達の古い先祖達の生活や、習慣がおぼろげながらだん／＼見えるような気がするだろう。このようにして、私達の現在と過去の人類の生活との違いをたたりをつないでくれる出土品や、古墳や、登呂遺跡のような住居や生活の跡の事を文化遺跡と云うのだが、更に萬葉集や、源氏物語のような文學作品や、奈良や京都の古い建築物や美術品、などを、文化遺物と言ひ、更に昔から私達の生活に必要な、いろ／＼の着物や、食器のようなものや、言葉のように形のないものに到る迄數えて見ればかぎりもない昔からの私達の生活に役立ってくれたものなどを、みんな、ひつくるめて、近頃の言葉では、文化遺産と云つて居るようだね。」

奈良朝平安朝頃の伊勢崎

「まあ、考古學の事は、それくらいにして、書物に出てゐる事を話す

純

後世の太織のような織物

佐位の郡

檜前部老刀自

天平神護二年十二月
授外從五位上

(續日本紀卷二十七)

天平神護三年三月上

野國佐位郡人外從五

位上檜前君老刀自賜

姓上毛野佐位朝臣

(續日本紀卷二十八)

と、奈良朝の始めの和銅六年に、相模・武藏・上野・下野・常陸の五つの國に施布を差出すように、朝廷からお命じになつて居り、翌年の和銅七年に、相模・武藏・上野の三國から、純を献じたと書いてある。

また現在、奈良の正倉院にある純(アシギヌ)の説明に、佐位郡の人純部の某と云うものが献上したものだと言書いてある。

こうした事を考えると、昔からこの伊勢府附近は、絹織物の産地だつた事がわかる。

その頃、この附近には、名橋・岸新・佐井・反治・淵名・驛家・美侶・雀部の八郷があつて、この全部をあわせて、佐位の郡と呼んで居た。

この中の、佐位の郷の女の人で、老刀自と云う人がある。この人は、孝謙・稱徳天皇のおそば近くつかえて、「上毛野佐位の朝臣」と云う姓をいたゞき、又、上野國造と云う、家柄をたまわつて、その郷里(上植木)には國分尼寺(?)があつたので、今でも礎石が残つている。上植木の巖寺と呼んでいるが、考古學の方の研究材料になる古瓦がたくさ

神護景雲二年六月
掌膳上野國佐位委女
外從五位下上野佐位
朝臣老刀自爲本國國
造(續日本紀卷廿九)
寶龜二年正月外從五
位上上毛野佐位朝臣
老刀自授從五位下
(上?) (續日本紀卷
三十一)

ん出るよ。この本箱に入れてあるのがその瓦のかけらだよ。」

先生の指さされた本箱の中には、私達から見ると、その邊の瓦のかけらと何の變りもないような瓦かけが一杯入つています。

「伊勢崎市の附近では、出土品も、石斧や石やじりの様な石器も出るし又古墳もたくさんある。權現山、まるすか山、華藏寺山それから半分しかないが西町の金藏院の裏の山その他にもたくさんにある、これらによつても、奈良朝や平安朝頃この邊がかなり繁榮していた事が考えられる譯だよ。この様に、文献と、考古學とを組み合せた考え方をして研究してゆくと、私達の先祖のいろ／＼の生活の状態だの文化の程度だのがだん／＼にわかってくるものなのだよ。どうだね。面白いかね。」

圖書館の女の人の汲んでくれたお茶をのみながら先生は一寸言葉をきりました。

鎌倉期の伊勢崎と赤石の地名